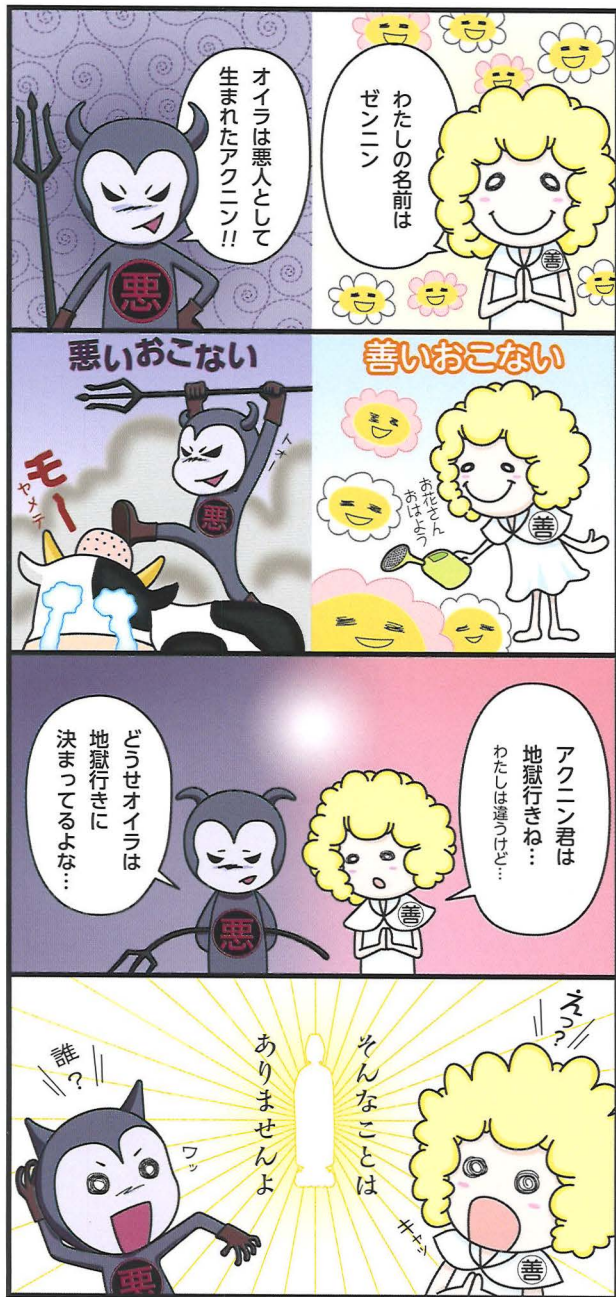




真宗大谷派 名古屋別院

〒460-0016
名古屋市中区橘2-8-55
TEL 052 (321) 9201
FAX 052 (321) 3184

<http://www.ohigashi.net/>

お東ネット

検索

悪

悪人正機つて実は...

悪

悪人正機

真宗門徒の心の糧として日常生活の座右に親しまれている『歎異抄』は、日常生活の常識を破るような警句にあふれています。「悪人正機」の名称で知られる悪人成仏の教えもそのひとつです。

ぜんにん
善人なおもて往生をとぐ、いわんや
あくにん
悪人をや。しかるを、世のひとつねに
いわく、悪人なお往生す、いかにいわ
んや善人をや。この条、一旦そのいわ
れあるににたれども、本願他力の意趣
にそむけり。

（『歎異抄』第三章・『真宗聖典』627頁）

高等学校の倫理の教科書などにもよく引用される有名な一節です。常識的にいえば、善人が救われ（往生し）て、

悪人は救われないというのが道理です。あるいは、善人が救われて、悪人“でも”救われるといえ、大方の理解は得られるでしょう。ところがそれは、一応は、もっともに思われるけれども、阿弥陀仏の誓願のところにそむいているといわれます。「悪人こそ救われる」とは、いかにも意表をつくことばです。倫理を破壊しているようにも思われます。

はたして、この悪人正機の教えは、人間の道理に外れたことを説いているのでしょうか。倫理破壊というような非難に相当するのでしょうか。私たちは、ここで言われる「本願他力の意趣」が何であるか注意してみる必要があります。

仏の慈悲は、しばしば父母の愛に喩えられます。父母の子どもたちに対する愛は平等です。しかし、もし子どもが病気にかかった場合、その愛はほかの誰よりもその病んだ子に最も深く注がれます。如来の慈悲心について『涅槃経』には、「もろもろの衆生において平等ならざるにあらざれども、しかるに罪者

において心すなわち偏に重し。」

（『真宗聖典』260頁）と説かれます。

親鸞聖人は、この一節を『教行信証』「信巻」に引用し、罪悪者にこそ一筋にかけられる仏の慈悲、阿弥陀仏の本願を喜ばれました。

自らの悪人性を自覚する者こそ、阿弥陀仏の本願をたのまずにはいられません。一方、無自覚な「善人」ほど、恐ろしい者はありません。かつて哲学者のバートランド・ラッセルが「善人の及ぼす害」（『懐疑論集』）というエッセーで述べたように、善人の過信が大きな迷惑となるということがよくあります。

本願は、善人にではなく、まさに悪人をめあてにして立てられています。悪人正機は人に悪を勧める教えではありません。みずからの罪悪性を自覚し、ひとえに弥陀の本願をたのめと勧める教えです。

やすとみ しん や
安富 信哉（真宗大谷派教学研究所長）